父思い出の地を訪ねて

Special Interview

北杜夫さん

小説家 /斎藤茂吉次男・宗吉

「あのような父を持って幸せだった。地元のみなさんが大切にしてくれるのはありがたい」

斎藤茂吉の次男で小説家の北　杜夫（斎藤宗吉）さんが、11月５日から７日までの３日間、妻・喜美子さん、娘・由香さんと本市を訪れ、斎藤茂吉記念館や宝泉寺、金瓶学校、生家など、父ゆかりの地を訪ね歩いた。

北さんは「何でも完璧主義な父は、小さいころは怖い存在だった。同時に無頓着さや天然のユーモアもあった」とした上で、「父の良いところも悪いところもわたしが一番受け継いでいると思う」。また大学時代、箱根強羅の別荘で茂吉の食事や身の回りの世話をしていたころの思い出に触れ、「父は年をとってからは脂っこいものは食べなかったが、大好物のウナギの缶詰だけは脂までペロペロおいしそうに食べていた」とエピソードを紹介。また「晩年、父を世話するようになり好きになった。父に対する子どもの感情は変化するもの」と、懐かしそうに語った。

一方で茂吉が作歌する姿については、「大石田で二度ほど見たが、神社の境内で米俵のふたを尻に敷いて、じっと考え込んでいる姿が印象的だった」と北さん。高校生のころ、それまで茂吉の歌を読んだこともなかった北さんは、『赤光』『あらたま』からの自選歌集『朝の蛍』を手にしたとき、「父の青年時代の感動的な歌に魅せられ、初めて崇拝した」のだという。

「あのような父を持って幸せだった。父のことを地元のみなさんが大切にしてくださるのはありがたいこと」。北さんは、こよなく愛したふるさとや人々への父の想いを重ね合わせるかのように、思い出の場所を一歩一歩しっかりと踏みしめていた。

旅行後、北さんが「市報かみのやま」のために、紀行文を寄せてくれたので、ここに紹介する。

父・茂吉が眠る宝泉寺の墓前で（11月６日）

大学時代の夏期、避暑のため滞在していた別荘で、茂吉の身の回りの世話をしていた北さん（昭和24年、箱根強羅で）

父茂吉の郷里である山形に行ったのは、昭和二十年六月に当時松本の高等学校の寮の食糧が乏しく一時閉館になったとき、父の実妹の嫁いでいた斎藤十右衛門さんのお宅にお世話になったのが最初である。寮では薄い雑炊ばかりだったのに白米を食べることができた。また冬休みには上山の実弟の山城屋四郎兵衛さんのお宅にも世話になった。上山の町では牛肉をいくらでも売っていて、その頃の食糧事情では夢のようであった。

のちに斎藤茂吉記念館には三度ほど訪れた。箱根の戦争中に作った二間きりの父の勉強小屋など実になつかしかった。仙台の大学時代、疎開先から戻ってきた父と、夏休みのほとんどをここで二人きりで暮したからである。洗い清められて屋内に飾られているから綺麗に見えるが実は朽りかけた粗末な建物だったのである。

先月、娘の頼みで実に久しぶりに山形へ行った。山城屋さんでは父の展示室も作られていた。また生家の守谷さんを訪ねたのは初めてであったが、ここでも父の記念室が作られていた。斎藤十右衛門さんの息子さんのお宅では、小さなお子さんがおられた。息子さんはここに来る人が勝手に家の裏まで見に来るので、わざと庭など汚くしていると話された。茂吉記念館では、兄が寄贈した東京大京町の父の寝室を初めて見ることができた。また父がかなりの俳句をも若い頃作っていることも初めて知った。

二日目に乗ったタクシーの運転手さんが親切な方で、また父のことをよく知っておられ、おかげで祖父が建てた紀一橋やその生家を初めて見ることができた。また昔一度行ったかつての高湯温泉のわかまつ屋さんがずいぶん立派になっていることも知ることができた。金瓶では昔青山の家によく送られてきた「のし梅」はもう作っていないと聞いたが、ここでは元のなつかしい姿を味わうことができた。

帰るとき、十右衛門さんの息子さんや運転手さんがわざわざ花束を駅まで持ってきてくださった。いくら父の子だとはいえあまりにお優しい心情であった。

山形の方々にお願いしたいことは、お子さまが大きくなられたら、なにとぞ茂吉記念館を見学させて頂きたいということである。また蔵王山初め山川の姿また種々の果物などには自負を抱いて頂きたいということである。

茂吉の歌碑巡り ⑰

多田昭三（松山）

金沢治右衛門家の歌碑

大君もほめたまひたる伯父の君はいのち長くて国の宝ぞ

毎年行われる金瓶の宝泉寺供養ないとのことであったので、金沢の折、茂吉ゆかりの場所と「茂吉医院に向かった。歌碑」巡りがまた楽しい。金瓶地　金沢医院に行く前に歌碑を見よ区の人々の茂吉への熱い思慕が感うと寄った金瓶の家には人影がなじられる中でその都度見学していかったが、広い庭園は手入れが行る。

今回は、その中の金沢治右衛門碑の周辺は大きな母屋と立派な土家の庭にある歌碑を取り上げよう蔵とが合致して、日本農家の典型と茂吉記念館に連絡したところ、的な風格すら感じられた。現在はその家には誰も住んでいな　雨模様の日であったが、金沢先いが、金沢医院の先生（金沢喜代生から話を聞くことができた。私志氏）になら話を聞けるかもしれ事だが、私が済生館（病院）の検査技師の頃にインターンとして金沢先生が来ていたので当時から存じていたものである。

金沢先生は、茂吉の父の兄に当たる人の曾孫である。東北大学医学部に入学した年に、茂吉の次男である北杜夫氏（小説家）が同大学を卒業したとの事であった。

生家の茂吉歌碑は、92歳で亡くなった伯父の長寿を祝って詠んだ歌を刻し、自分が生きているうちにと金沢先生の父である義雄氏が建てたそうである。「私は茂吉のことも短歌も分からないから」という事で、インターン時代に会われた諸先生の事などを懐かしく話した。

伯父の長寿を祝い詠まれた歌がその外に４首あり、「賀寿」として歌集『寒雲』に見られる。

《歌意》
世の中の人皆が尊敬し祝いほめる伯父の長寿は、日本の国の宝となることであり、めでたいことであることよ。
（歌集『寒雲』所収）

歌碑は昭和47年10月15日建立。碑陰の撰文は茂吉の長男茂太氏によるもの。昭和14年1月22日の茂吉の日記には、伯父治右衛門のために作歌し揮毫した記述が見られる。

上山ふるさと再発見!! ⑥⑦

愛宕神社と松木塔

山元地区、小滝街道に沿った狸森集落の中程に、「崖岩」と称される断崖に、石造物群と共に愛宕神社が建立されている。明和元年（１７６４）以前に建立されたと見られる愛宕神社の本尊は、鎧と兜をまとって騎馬にまたがっている勝軍地蔵菩薩像である。愛宕神社を祀る諸々な説はあるが、一般的に言われているのは、合戦の時にまとった勝軍地蔵の姿と、戦に勝てるよう「勝」と「軍」との語呂合わせによる信仰で、城や館跡の近く、または軍事的な要所である街道端に建立されている例が多い。

また、断崖上には、自然石に「万延元庚申年・九月吉祥日・松木塔・脂掻三十三人」と刻された全国でも珍しい塔が建てられている。「脂掻」は「松脂」のことで、山元地区の松脂掻きを行っていた人たちが、松の木に感謝し、緑豊かな森林を次の世代に残そうとした願望からの供養塔である。

「草木国土悉皆成仏」の精神に基づいた「草木塔」の供養と同義の意味であると考えられ、これらの精神は仏教思想が大きく影響している。

（文・写真　上山市文化財保護審議会委員　加藤和徳）

松木塔

狸森集落の愛宕神社